

釜ヶ崎の赤いげ先生

— 本田良寛伝 —

《7》

鉄をほったらかしにして、工跡跡は市の公団になるはずなのに、その整地も遅々として進まない。見るに見かねて、集落の人たちが、鉄の処分と整地に協力する() ことになったわけである。集落のくす屋は当然も、貧しい集落の人びともうるおつというもので、管理責任者の近畿財務局は、いまだに残った

しかし、鉄くすを収集した。アパッチ集落内では、労働者たちと監視員、警察官との間に衝突が起りだした。その追うものも追われるものも必要なのはそろって、捕刺をマスコミは当時の人気西部劇のアクションに見立てて、「アパッチ」と呼んだ。

父の跡を継いだ良寛先生の本田医院(城東区鴨野)は「アパッチ集落」の活動の最盛期には埋蔵の掘削と運搬で事故も多発した。鉄や金物の運搬中に電車にはねられたり、監視員に追われた作

「鉄屑掘りは不法侵入で盗みではあったが、地下で腐らすよりは掘り起す方がよい」という屁理屈がついていた。その内輪のルールを破って、集落のなかや近くの善良な工場を荒らす者があらわれた

こうした無法行為に対してマスコミも批判的な報道が自立し始めた。このような状況が続けばアパッチ集落の良識派に対しても永遠に「鉄泥棒」という汚名だけが残る。

こんな中、アパッチ集落の幹部の中からも「いつの後も警察による取締り強化とアパッチ集団の活動と自衛が繰り返さる」と、集落での往診に奔走していた良寛先生に「患者との対話を嫌がられたが、掘り尽くされ巨額の埋蔵鉄も底をつき、鉄の出方も減ってきた。さらに、金ヘンアーム」もよぐ行った。そこで治療を終えると、「まあ、売っても日雇いの日当以下という状況になってき

「患者との対話を嫌がられたが、掘り尽くされ巨額の埋蔵鉄も底をつき、鉄の出方も減ってきた。さらに、金ヘンアーム」もよぐ行った。そこで治療を終えると、「まあ、売っても日雇いの日当以下という状況になってき

「患者との対話を嫌がられたが、掘り尽くされ巨額の埋蔵鉄も底をつき、鉄の出方も減ってきた。さらに、金ヘンアーム」もよぐ行った。そこで治療を終えると、「まあ、売っても日雇いの日当以下という状況になってき

泥酔するまどぎんぐ

から10分ほどの場所であった。良寛先生はアパッチ集落の出現をこう話していた。

患者目線で往診
「患者との対話を嫌がられたが、掘り尽くされ巨額の埋蔵鉄も底をつき、鉄の出方も減ってきた。さらに、金ヘンアーム」もよぐ行った。そこで治療を終えると、「まあ、売っても日雇いの日当以下という状況になってき

アパッチ集落との交流



良寛先生もよく見学していた釜ヶ崎の三角公園夏祭り

1960年代の最盛期にはアパッチと呼ばれる組織が10ほど活動していた。アパッチ集落の労働者たちは、工跡跡から掘り出した埋蔵鉄で大八車の車輪をタイヤに換えて作った特車を使い運搬し

解散の橋渡し役
アパッチ集落に仕事を求めて流れてきた労働者は近くの工場や持ち主の手に引きつらした鉄材にまで手を伸ばし、集落のものまで盗むようになった。良寛先生はこの当時から

「集落の人たちは元気づいた。放置したままの日の目をみすに朽ち果ててゆく鉄のことを思えば、これを掘り出して再生させるのは、世の中のためでもある。鉄も得心である。日本の復興にも役に立つ。しか

太平洋戦争の終戦前日、1945年8月14日に行われた米軍による大阪空襲で大阪砲兵工廠は壊滅したが、焼け跡と化した広大な敷地には膨大な量のくす鉄類が残された。その近くの集落に住む在日朝鮮人たちは、不発弾の恐怖と戦いながらくす鉄類を回収し、売却して生計を立てていた。

本田良寛先生はその当時の様子を目撃し「こぼん釜ヶ崎診療所」で紹介している。